

青年の模索によりそい、展望ひろげる役割を

——大きな民青同盟をつくるため、みんなの力をあわせよう

2010年10月29日 日本民主青年同盟中央委員会

「自分を認めてくれる仲間ができて、人と自分を比べて落ち込むことが少なくなった」「班ごとに学んだことを発表し、民青の学習のおもしろさに気づいた」「国会要請に参加して、自分たちの行動で政治を動かせるんだと感じた」——「民青同盟に出会えてよかった」という思いが交流されています。その魅力と役割を全国どこでも発揮し、もっと大きな民青同盟をつくっていくために何が大切か——みんなで考えることをよびかけます。

1、青年の探求・模索と民青同盟の役割

(1) 民青同盟の基本的性格が未来をひらく力

●青年の願い、模索と日本政治の1年

「どうすれば貧困をなくし、若者がまともに働ける社会になるのか」「『基地のない沖縄』『核兵器のない世界』をつくることはできないのか」——仕事や生活に追われ、将来に不安を抱く青年も、毎日の生活を楽しく送っている青年も、真剣に考えています。長期化する失業や就職難、給与・ボーナスの削減や長時間過密労働、高い学費などに直面し、競争と「自己責任」の重圧によってガマンを強いられながら、「なんとかしてほしい」と願っています。沖縄の米軍基地撤去を求める世論と運動の高まり、核兵器廃絶へむかう世界の激動のなかで、「自分に何ができるのか」との思いをめぐらせています。反貧困ボランティアや環境を守る活動などに参加し、社会の現実とむきあい、声をあげる青年もひろがっています。

昨年総選挙で青年の「この現実をかえたい」との思いは自公政権にピリオドをうちました。しかしそれ以来一年、代わった民主党政権は、アメリカと財界の圧力に負け、「抜け穴」だらけの労働者派遣法「改正案」や法人税減税のための消費税増税をうちだし、米軍基地を沖縄・辺野古におしつけようとするなど次々青年の期待と公約を裏切り、今や古い自民党政治と何ら変わらない財界・アメリカいかりの政治を進めています。菅民主党政権に、「たいして変わらないじゃないか」「国民の声を聞いているのか」と、青年から冷たい視線が注がれています。

7月参議院選挙で多くの青年は、「民主党に失望したが、自民党にも戻りたくない」との思いを抱えていました。しかし、「自民か、民主か」の選択をおしつける「二大政党づくり」のもとで、自分の願いを託せる道が見えずに、とまどいながら投票行動を決めざるをえませんでした。「正社員を増やしたら企業がつぶれてしまうのか」「米軍基地をなくして日本の安全は守れるのか」「本当に政治はかえられるのか」——青年のなかで「あきらめ」の気持ちと「何とかしたい」気持ちがせめぎあっています。この探求と模索は、青年の切実な願いや実態の解決をもとめて発展せざるをえません。

●「ほんとはこうしたい」…切実な願いを政治を動かすエネルギーへ

『核兵器はなくせる?』『なくせない?』の意見交換から核兵器問題を学習」「自分史交流や」3

スピ」を重ねるなかでほとんどしゃべらなかつた仲間の要求が見えてきた」——民主党政権が青年の願いに背をむけ、政治への模索がうずまくなか、民青同盟は「何でも語りあい、どんなことでも一人ひとりの声にこたえて学び行動する」班活動を大切に、「全国青年大集会2010」と雇用と暮らしを守る運動、NPT再検討会議や原水爆禁止世界大会にむけた核廃絶のとりくみなど、切実な願いの実現に力をつくしました。「知りたいこと」「わからなかつたこと」にねざして、食べ物企画やディベート、クイズをもちこんだ多彩な学びがひろがり、青年・同盟員みんなが学ぶ楽しさを発見し、成長を支えあうことを大事にしてきました。

参議院選挙では「自分にとっての選挙」を語り合い、日本共産党の前進が新しい政治をつくる一番の力になることを学び、「My うったえ」やつどい、メールやインターネット上の結びつきを生かした対話にとりくみました。「消費税増税は仕方ない」「政治はかわらない」との閉塞感も寄せられ、日本共産党への投票に結びつけるには苦労がありましたが、民青同盟が「仕方ない」「かわらない」という声の奥にある「ほんとはかえたい」思いに心をよせて交流し、模索によりそい展望をひろげる力に磨きをかけたことは大変重要です。また、今後民青同盟の仲間を増やし、日常的に政治の異常を学んで政治をかえる力をもっと大きくしていくことも大事な教訓です。

全国大会後の活動をふりかえると、「青年の連帯をきずき、成長を支え合い、行動にふみだす」居場所づくりの努力とともに、「青年の模索によりそい展望をひろげる」活動が大きな力を発揮してきました。青年の模索に民青同盟はどうこたえてきたでしょうか。

- 「仕方ない」「かわらない」という言葉の奥にあるガマンさせられている実態、「ほんとはこうしたい」という切実な願いを語り合い、青年との連帯をきずく。
- 科学的なものの見方・考え方、青年の要求や生きづらさのおおもとにある異常な政治、社会をかえる道筋をつかめる科学的社会主義と日本共産党綱領を学び、「かわるかもしれない」「かえられるのでは」という希望の芽をはぐくむ。
- 要求実現をめざして実際に政治に働きかけ、「声をあげれば政治は動かせる」という確かな手ごたえをつかみ、語りひろげる。

このように、私たちは青年に「社会はかわるし、かえられる」との展望をひろげ、「ほんとはこうしたい」という願いから政治を動かすエネルギーをつくりだしてきました。その根本には、青年の願いの実現に力をあわせるとともに、日本共産党を相談相手に科学的社会主義と日本共産党綱領を学ぶという基本的性格の力があります。青年の探求・模索にこたえて、いま民青同盟が日本社会を覆う閉塞感を乗り越え、未来をひらく役割を発揮するときです。一人ひとりの青年の願いや模索にこたえるためにも、青年が大切にされる新しい社会をつくるためにも、仲間を迎え、班の結成と地区再建をすすめ、大きな民青同盟をつくるために力をあわせましょう。

(2) 青年とともに進める班活動——要求にこたえ、模索によりそい、政治を動かす

「みんなで食材をもちよって秋の味覚祭りを開催」「地方議会への要請をめざして若者アンケートをスタート」「班で古典学習をはじめた」——9月のよびかけにこたえ、新たな班プランがつけられはじめています。スポーツ大会、粉もんパーティー、恋愛・人間関係しゃべり場、「民青新聞」「わ

れら高校生」を使った学習、ハローワークアンケート調査など、「交流」「学び」「行動」する班活動がひろがっています。つながりのある青年といっしょに班プランを具体化・実行し、青年にひらかれた居場所をめざして班活動をすすめましょう。

●「まともに生活できる仕事を」「基地のない沖縄を」「お金の心配なく学びたい」——要求実現の展望を学び交流しながら

「時給635円のバイトで生活。正社員の仕事が全然ない」「就職活動で3年生から大学の授業に出られない」——仕事の自分史交流、職種別のつどい、実態アンケートなどで、青年・同盟員の仕事や暮らしの実態をリアルにつかみ、政府・自治体に届けましょう。学生班と県・地区委員会で、「就活カフェ」や働く先輩をよぶ企画など進路や就職について語りあい励ましあえる場をつくるとともに、会社説明会や就職セミナー、大学などで実態調査を行い、就職活動の実態を告発しましょう。また、学費値下げと奨学金・学費免除制度の拡充や、大学予算削減ストップの運動にも取り組みましょう。

沖縄のたたかいと連帯し、学習と交流を大切にしながら、米軍基地撤去をめざすシール投票と言メッセージで宣伝行動をひろげます。沖縄県知事選挙(11月28日投票)が告示される11月11日(木)～18日(木)の1週間、「米軍基地撤去を求める全国いっせい行動」にとりくみ、「沖縄の思いを無視しないで」「日本のどこにも米軍基地はいらない」という青年の声を集めましょう。

「どうしたら正社員を増やせるのか」などの声にこたえて要求実現の根拠と展望を学ぶこと、青年大集会DVDなどを活用して政治を動かせる実感を知らせることを重視します。青年の雇用や暮らしを支え、平和を発信する地方自治体をつくるチャンス——来年の「いっせい地方選挙」をめざして、地方自治体の役割や現状についての学習、日本共産党の地方議員・候補者を招いたつどいにとりくみましょう。

●綱領・科学的社会主義の学習——「綱領・古典の連続教室」を生かして

「心の中で思っていた『残業代ほしい』『連休くれよ』という思いが間違っていなかったと元気がでた」「マルクスや小林多喜二の本気で生きる生き方に心をうごかされた」——9月にひらかれた「学ぶつながる かえられる」講座では、政治をどうかえていけば青年の願いを実現できるのか、民主的改革のプログラムや未来社会への展望を学びました。とくに、綱領と科学的社会主義を自分の生き方にひきつけて学び、多くの参加者が「社会をかえたい」「かえていける」との確信を深めたことは重要です。日本共産党綱領と科学的社会主義を学ぶことが、自己責任論を乗り越え、“ほんとはこうしたい”という思いを励まし、“あきらめ”から“希望”への架け橋となって社会をかえる生き方への一歩を育んでいます。

12月から日本共産党が“初心者にもわかりやすく、おもしろく”をモットーにひらく「綱領・古典の連続教室」は、楽しく継続的に綱領と科学的社会主義を学ぶ絶好の機会です。夕食交流会や要求しゃべり場、学びの自分史交流、「〇×クイズ」などとセットで、学習も交流も充実した「自分たちのつどい」にしてとりくみましょう。講義を聞けなかった仲間と視聴会をひらいたり、「わからなかったこと」もいっしょに考え、みんなが最後まで受講できるよう班で支えあいましょう。

2、未来をひらく大きな民青同盟をめざして

「班員の声を聞き流さないで、どんなことでも実現してきた」「人数が少なくても班会議をひらいて、集まることを大切にしてきた」——全国の職場・地域・学園で、一回一回の班会議をなにより大切にし、魅力ある班活動をつくろうと力をつくしてきました。出された声、つぶやいた願いを一つ一つ実現していく努力を積み重ね、同盟員・青年の願いや模索に深くねざして活動する民青同盟をつくってきたことは、青年を民青同盟の仲間を迎えていく新たな条件と可能性をひろげています。

第3回中央委員会は、第34回大会決定にもとづいて班の魅力を輝かせることをこれからも大切にするとともに、民青同盟の仲間を増やし、大きな民青同盟をつくるため、みんなの知恵と力をあわせることを心からよびかけます。

(1) 仲間を増やし、大きな民青同盟をつくる意味を話し合おう

「残業代は半分しかつかない。でも働いているだけマシかな」「なんで日本はアメリカに何も言えないのか不思議」「学校ではキャラをつくっている。本当は人と話すのが苦手」「自分のやりたいことが見つからない。進路や就職を考えると重くなる」——班活動や企画で結びついた青年、班員の友人や同僚、宣伝で出会った青年など、みなさんのまわりの青年はどんな実態や願い、模索をもっているのでしょうか。「よく知らないな」と思ったら、実態アンケートや同盟員アンケート、署名や折り鶴を使って聞いてみるのが大切です。

その青年にとって民青同盟に加盟することはどんな意味をもっているのでしょうか。「民青に入って、自分の気持ちをちゃんと話せるようになった」「社会はかえられると希望がもてた」——一人ひとりの民青同盟の魅力をふりかえってみてください。その魅力いっぱいの民青同盟は、今はまだ加盟していない青年にとっても大切な存在になるかもしれません。

この社会のなかで民青同盟が大きくなることはどんな意味をもっているのでしょうか。新しく加わった仲間が、願いを実現する展望をつかみ、“社会をかえる主人公”として成長することは、青年がガマンを強いられている今の社会をかえる力をもっと大きくしていくことになるのではないのでしょうか。

県・地区・班それぞれで、まわりの青年の願いや模索と結んで「青年を仲間を迎えることの意味」「大きな民青同盟をつくる意味」を話し合うことが大切です。「仲間を迎えて自分の職場や学校に班をつくりたい」「毎年卒業生を上回るメンバーが増えていく班になりたい」「地域で存在感を示せる大きな地区をつくりたい」など、“自分たちはどんな民青をめざすのか”を交流し、みんなの気持ちをこめて仲間を迎える目標をつくりましょう。また、2010年12月末までのプランと節目標をつくり、仲間を増やして2011年を迎えましょう。

第3回中央委員会では、高校生の願いにこたえ仲間を迎えることを呼びかける「アピール」を出しました。県・地区委員会などで討議し、高校生分野の前進のために力を合わせましょう。

(2) 県・地区委員会と班が相談し、力をあわせて新しい仲間を迎えよう

「友だちに民青を知ってもらって、今までよりも関係が深くなった」「班会に誘ったらすごく楽しそうにしている、民青の大事さを実感できた」——仲間を増やす活動は、まわりの青年と願いや模

索を語り合い、民青同盟の魅力や役割も実感できる、楽しくやりがいのある活動です。「公開班会に誘って、『3分間スピーチ』や『民新』を読み合わせて加盟をよびかけた」「日本共産党から紹介された青年を班のみんなで訪問」「実態アンケートで連絡先を書いてくれた青年に電話してみた」「大学でチラシを配ったら知らない学生が企画に来てくれた」など、青年との結びつきも、実際に仲間を増やす工夫や努力も多彩です。「やってみようかな」「あの人に声をかけたいな」という思いを大切に、どんな人にどう働きかけるか、県・地区委員会のリーダーや経験のある同盟員、日本共産党の方と相談し、知恵と力をあわせてとりくんでみましょう。

「加盟をよびかけて断られたらどうしよう」「どう声をかけたらいいのかわからないし、自信がない」などの不安やためらいもあります。「まずは署名や実態アンケートからお願いしてみた」「班会に誘ってみるならできる」など、どんな小さなことでも、一人ひとりの挑戦、ふみだした一步一步を支えあい、うまくいかなかったことや悩みがあればみんなに相談し、励ましあってとりくみましょう。

同時に、仲間を迎えてこそ、力をあわせて願いを実現できるし、いっしょに成長し、充実した人生を送ることもできるのではないのでしょうか。仲間が増えれば班活動もさらに魅力あるものに発展するのではないのでしょうか。加盟するかどうかは働きかける相手が自分の思いで決めるものです。「僕は加盟してこんなところがよかったよ」「私はあなたといっしょに活動していきたいと思っている」という気持ちを素直に伝え、加盟をよびかけましょう。

社会のしくみの“そもそも”が分かり、かえていける展望が見えてくる「民青新聞」「われら高校生」の値打ちが光っています。「民新の『班活動スペシャル』の記事を読んで、班でやりたいことが見えてきた」「来ていない同盟員に手紙と一緒に届けたら、『民新読んだよ』ってメールがきた」など、機関紙を活用することで、班活動が充実し、青年や同盟員と結びつく力になっています。班会議や加盟のよびかけなどさまざまな場面で機関紙を活用し魅力を伝え、同盟員・青年に購読をよびかけるとともに、配達・集金に力をあわせましょう。

（3）地区委員会再建と再建後の発展をめざして

「地区をつくって身近なところに班活動の相談相手ができる」「自治体要請やスポーツ大会など、大きなとりくみもできるようになった」「地域にどんな民青をつくるのか真剣に考えるようになった」——地区委員会の再建は、民青同盟の魅力と役割をいっそう豊かに発揮していくためにも、地域・職場・学園に根をはった大きな民青同盟をつくる上でもカナメです。班が少数のところや班活動に苦勞している地域でも、班のリーダーの輪をつくり、地域協議会をひらいて班活動の交流・相談をはじめることが大切です。大会決定や中央方針をみんなで討議・具体化・実践する活動経験を重ね、新しい仲間と班を増やし、地区再建の展望をきりひらくことをめざしましょう。

再建した地区委員会の前進・発展をめざすために、「3分間スピーチ」や誕生日会、地区合宿などの交流・連帯の努力とともに、科学的社会主義と日本共産党綱領、民青同盟の大会決定・組織活動の学習と交流を大切にし、リーダーの人的連帯を“民青同盟と地区委員会の前進をいっしょにめざし、支えあう”仲間の輪へ発展させましょう。

(4) 財政活動——「民青を支えたい思い」を伝えて

民青同盟の魅力と役割を支えているのが財政活動です。「財政・機関紙活動のしおり」や大会決定を学び、同盟費の納入、機関紙代の集金、冬期募金の3つの分野のとりくみをすすめ、財政の確立へ力をあわせましょう。班会議に参加していない同盟員や、連絡がつかない同盟員ほど、切実な実態を抱え、参加できない自分を責めていることも少なくありません。すべての仲間に声をかけ、願いや関心を聞いて班プランにもりこむ活動と一体に、「自分にとっての民青の魅力」「民青を支えたい思い」を伝え、同じ仲間として率直に同盟費の納入をよびかけましょう。

青年の模索によりそい、展望をひろげ、大きな民青同盟をつくるため、みんなで力をあわせましょう。

以上

3回中央委員会アピール

県・地区委員会、高校生相談員、高対部のみなさんへ

高校生の成長を支えあい、高校生班活動の前進へ力をあわせることを心からよびかけます

2010年10月29日 日本民主青年同盟中央委員会

1、高校生の援助へ県・地区委員会みんなの総力を——高校生の成長と自らの成長を重ねて

●高校生を支える“お兄さん”、“お姉さん”はかけがえのない存在

「点数のためではなく自分のための学びに出会えた」「民青の魅力は悩めること。自分がどんな意見なのかふりかえって、自分が分かる」——班活動のなかで、高校生は生きること、学ぶことの喜びを見つけていきます。「相談員さんが話を聞いてくれるのがうれしい」「民青の人に言われて人を見下している自分に気づいた」——高校生といっしょに活動し、ともに悩み生き方を考える“お兄さん”、“お姉さん”、大人の存在は、高校生のかけがえのない心の支えであり、成長の支えです。「話を聞くだけで元気になって帰っていく高校生を見て自分も元気になれる。人間っていいなと思うようになった」「高校生を苦しめる社会を本気でかえたいと思うようになった」——高校生を支えながら、自らも成長するのが高校生分野の活動です。『『ここにいる人たちは裏切らないから』と、はじめて悩みを話してくれた』『いっしょに活動してきた高校生が班を卒業するとき、『民青で自分を見つけた』と話してくれて涙が出た』——成長していく高校生の姿に、やりがいもいっぱいです。

●高校生応援チームをみんなでつくろう

多くの高校生が、元気な笑い声の奥にさまざまな不安を抱えています。「学費が高いから親にだま

って夢をあきらめた」「中学でいじめられてから、同年代と話すのがいまでも苦手」「就職は難しいって聞く。やりたいことも決まってないから不安」——素っ気ないそぶりの裏側に、“どう生きるか” “なぜ学ぶのか” の模索を抱えながら、毎日を一生懸命に生きています。いま高校生活も忙しく、人間関係の難しさが深まるなかで、集まること自体にも苦労があります。その中でも、一回一回の班会議や3分間スピーチ、一ページの「われ高」の読み合わせ、そのつみ重ねが高校生の生きる力となり、「悩んでいるのは自分だけじゃないって知れて、世界が広がった」「全然しゃべれなかったオレが、こんなにしゃべれるようになった」と、人間的成長を育んでいます。また、高校生班で成長した多くの同盟員が、職場・地域・学園の班のリーダーとなり、県・地区委員となって活躍しています。民青同盟が高校生の切実な願いにこたえ、生きることの喜びをひろげるためにも、民青同盟と青年運動の未来を担う次の世代をつくっていくためにも、新しい高校生班をつくり、班活動と高校生の成長を励ますことがいよいよ大切になっています。

班活動を日常的に援助する相談員はもちろん、「同盟員のお菓子の差し入れに高校生が大喜び」「学生の仲間がテスト勉強に協力」「いろんな職業の同盟員を呼んで進路企画を開催」など、地域班、職場班、学生班のメンバーができることもたくさんあります。県・地区委員会が持てる条件と可能性をくみつくし、相談員の複数確立をめざすとともに、高校生を支える集団（高校生応援チーム）をつくり、ひろげることをよびかけます。

2、仲間を増やし、新たな高校生班をつくるため力をつくそう

「日本共産党の紹介で加盟した高校生が次つぎ友だちを誘って仲間に迎えている」「地域班と地区委員のメンバーで結びつきのある高校生を訪問し、班会に来てくれた」——いま、高校生班がない県・地区委員会も少なくありません。高校生の仲間を増やし、新たな高校生班をつくるには、高校生自身の増やしたい思いや行動とともに、県・地区委員会や相談員さんの知恵と力をあわせたりくみ大きなカギを握っています。2011年3月に予定している全国高校生集会をめざして、高校生分野の前進へ思いきって力を注ぎましょう。

●高校生の話を聞くことが出発点——「やりたいこと」「知りたいこと」にこたえよう

同盟員や対象者の高校生の学校生活、授業や部活、クラスの間関係、休日の過ごし方や家族のこと、好きな食べ物、趣味、得意なことと苦手なこと、「最近どう？」と声をかけ、何でも話を聞いてみるのが出発点です。班会議に参加したり、対象者訪問にとりくみ、いっしょにごはんを食べたり遊んだりしながら、アンケートや会話の中で高校生の「やりたいこと」「知りたいこと」を聞き、一つひとつこたえることを大切にしましょう。いじめや人間関係などを考えるしゃべり場、試験対策勉強会、クリスマスパーティーや誕生日会、戦争・被爆体験や貧困を考える学習などを重視します。

●仲間に迎え、班活動を援助し、高校生の成長を

結びついた高校生に、「民青紹介ビデオ」やパンフを使って加盟をよびかけましょう。加盟するにあたっての不安、疑問に丁寧にこたえながら、ねばりづよく働きかけることが大切です。

迎えた高校生一人ひとりを大切にし班活動を支えるために、高校生応援チームで相談し、なんでも交流し、学び行動する“高校生が主人公”の班活動をつくることに、なにより力をつくします。また、長期休みや土日、班活動のなかで、高校生の関心や願いにそくした科学的社会主義や日本共産党綱領の学習を重視します。迎えた高校生が民青同盟の魅力を実感し、友人や同級生を誘ってさらに仲間が増える流れをつくりましょう。

●高校生応援チームの学習と交流、体制強化と一体で進めよう

このアピールを活用し、民青同盟に理解のある職場に勤める同盟員や、土日に休みがとれたり、仕事が定時で終わる同盟員、学生同盟員などと、高校生分野のとりくみの大切さを話し合い、高校生応援チームに加わってもらいましょう。県・地区委員会で「高校生応援プラン」をつくり、目標をもって同盟拡大にとりくみ、新たな班の結成をめざすことが大切です。県・地区委員会で高校生応援チームの楽しい交流会を定期的にひらき、「われ高」を使って自分たちの高校時代の交流もしながら、相談員や高校生を援助するメンバーがなんでも相談できる場をもちましょう。対応する日本共産党と相談の場を持ち、力をあわせましょう。

「高校生が民青を『第二の家だ』と言ってくれた」「高校生班ができて地区全体が元気になった」——高校生班をつくり、発展させてこそ、日本社会を覆う閉塞感をのりこえ、未来をひらく力が発揮されます。県・地区委員会みんなで高校生分野の前進へ力をあわせることをよびかけます。

以 上

第3回中央委員会への常任委員会報告

2010年10月27日 民青同盟中央常任委員会

●会議の目的

中央常任委員会を代表して、第3回中央委員会への報告を行います。

この会議の目的の第一は、青年の願いや模索と政治情勢から民青同盟の役割を確信にするとともに、大会後のとりくみの教訓を明らかにし、今後の活動に生かしていくことです。第二は、大会決定と9月の「よびかけ」の提起にもとづく活動の強化方向、とりわけ組織づくりの前進を勝ちとる方針を練り上げることにあります。

報告では、決議案で明らかにされている中心点の説明に加えて、県・地区委員会などの機関やリーダーとして何を重視するか、学生・高校生分野でどう前進を勝ちとるか、第34回大会決定が述べた「居場所の力」と同盟活動の発展方向など、決議案に詳しく書かれてはいないけれども重視すべきいくつかのテーマについて述べたいと思います。

1、青年の探求・模索と民青同盟の役割

第一章では、一つ一つの班活動、青年大集会や参議院選挙のとりくみのなかで、出会ってきた青年や同盟員の声をふりかえって、民青同盟がどんな魅力や役割をもっているか、自分たちがこれから何を大切に活動を進めていくのかを考えることが大切です。

(1) 基本的性格の値打ちを深く確信に——大会後の情勢と活動をふりかえって

●青年の願いに背をむけてきた民主党政権——青年の探求と模索をどうみるか

(1) では、青年の願いや模索と大会後の情勢をふまえて、民青同盟の役割について述べています。

「人間らしく働きたい」「戦争も核兵器もない世界を」「沖縄から基地の撤去を」など、大会後、青年の切実な願いの実現へ民青同盟は力をつくしてきました。しかし、この1年、民主党政権は青年の願いに背をむけてきました。労働者派遣法の改正では「専門業務」「常用型」という「抜け穴」をつくり、若者の使い捨て労働を温存しようとしてきました。米軍基地問題では、「県外・国外へ移設」という公約を破り、沖縄の名護市・辺野古へおしつけようとしてきました。法人税減税とセットで、貧困・格差に苦しむ青年をいっそうおいつめる消費税10%への増税をうちだしてきました。青年の期待と公約を次つぎと裏切り、今や古い自民党政治となんら変わらない、なんでも財界・アメリカいいなりの政治にたどりついています。こうした体験を通じ、青年のなかからも、「たいして変わっていないじゃないか」「自分たちの声を聞いているのか」と失望の声があがっています。青年の願いの実現のためには、この財界・アメリカいいなりの政治をおおもとからかえなければいけない——これは私たちがこの1年、痛感してきたことではないでしょうか。

しかし、どうすればこの状況を打開し、人間らしく働ける社会、貧困のない社会、基地も核兵器もない社会をつくれるのか、多くの青年にその道筋と展望が届いているわけではありません。「米軍

基地は抑止力として必要」「財政危機だから消費税増税はやむをえない」「大企業の負担を増やすと国際競争力がなくなる」などの考えがふりまかれ、「自民か、民主か」の選択をせまる「二大政党づくり」によって、青年の願い実現をかかげている日本共産党は「知らない」「力がない」と選択肢から除外させられています。このもとで、青年に模索と閉塞感があることは、7月の参議院選挙ではっきりあらわれていました。「どこに入れたらいいかわからないから教えて」と同盟員に連絡してきた青年も相次ぎました。街頭の対話で「もう選べないから投票行くのをやめようか迷っている」などの声にもぶつかりました。青年は「民主党に失望、自民党にも戻りたくない」との思いをかかえつつ、願いを託せる選択は見えず、迷いながら投票行動をとりました。「政治はかわらない」というあきらめの気持ち、切実な実態からくる「なんとかしたい」気持ちがせめぎあっています。そして、いまの就職活動はおかしいと疑問をもち、仲間と語り合う学生、労働相談をつうじて悩みながら声をあげる青年など、模索、探求しながら一歩ふみだす青年も生まれています。「二大政党」の枠内では、こうした青年の願いを実現する展望がひらけないことは明らかです。広範な青年がいただいている一つひとつの探求と模索は、青年の願いや実態の解決をもとめて、財界・アメリカいなり政治をおおもとから転換するたたかいへと、必ず発展せざるをえません。

●きりひらいた“模索によりそい展望をひろげる”活動

こうした情勢のもとで、民青同盟はどんな魅力と役割をもっているのか、どうしたら多くの青年と手をつなぎ、青年の要求実現へ政治と社会をかえていけるのかを、決議案は明らかにしています。大会後の活動をふりかえれば、民青同盟は今日の青年の願いや模索に深くねざした大事なとりくみをしてきたし、確かな手応えをつかんできました。

大会決定にもとづいて、「何でも語り合い、どんなことでも一人ひとりの声にこたえて学び行動する」班活動を大切にしながら、「全国青年大集会2010」の成功、原水爆禁止世界大会やNPT再検討会議へのとりくみなど、要求運動、学習活動の確かな前進をきずいてきました。各県からの報告でも、「『若い人が貧乏なのは仕事を選んでいるから』『2中委は読みたくない』といていた同盟員の声にこたえ、バレーボールカップや『共産党がなぜ嫌われているか』の疑問にこたえる『赤い人のつどい』をひらき、『自分の賃金が低いのも政治が関係していると感じる』と話し始めた」（和歌山）「将来美容師をめざす班員の声にこたえて『髪の毛を切る』班会をしたり、学費の学習会にとりくむなかで、不機嫌な態度でほとんど話もしなかった高校生が明るくなり、『学費免除の運動に加わりたい』と言っている」（三重）など、大会決定への確信がこもごもつづられていました。

とくにこの1年、青年との対話・交流のなかで民青同盟が試行錯誤しながらきりひらいてきた“青年の模索によりそい、展望をひろげる”活動は大変重要です。参議院選挙のとりくみは、その力を鮮やかに発揮したとりくみとなりました。民青同盟がどのように青年の模索にこたえてきたのか、決議案は3つのプロセスをのべています。

——「仕方ない」「かわらない」という言葉の奥にあるガマンさせられている実態、「ほんとはこうしたい」という切実な願いを語り合い、青年との連帯をきずく。

第一は、「仕方ない」「かわらない」という言葉の奥にあるガマンさせられている実態、「ほん

とはこうしたい」という切実な願いを語り合い、青年との連帯をきずくことです。

神奈川県委員会は、参議院選挙で消費税問題だけでなく、仕事や暮らし、米軍基地のことなど、青年の願いや関心にそって対話をひろげました。ある宣伝では学生3人と対話になり、「僕は、米軍基地のある大和市に住んでいる。ガマンしているけれど、仕方がない」「米軍がいるほうが安心」と話していました。しかし、沖縄の基地の実態を伝え、「ほんとは基地も戦争もないほうがいいと思わない？」と聞くと、「そりゃそうだ。せーのでなくなるなら、なくなった方がいい」といつてくれました。そこで世界で軍事同盟が機能停止していることや日本共産党がアメリカに沖縄の思いを伝えたことなどを紹介し、最後は「武力じゃなく話し合いで解決する姿勢が大切だよ」というと、「そうだよな」と共感がひろがりました。

また、対話だけでなく、企画や学習会でもこの努力がありました。「あなたが総理」の企画は、前回の総選挙から各地にひろがったとりくみでしたが、これは「無理だよ」「仕方がないよ」という前に、“もし自分が政治を動かせるなら、本当は何がしたいか”という願いを引き出し、あきらめがある青年とも心通う交流をできるようにする大事なとりくみでした。

——科学的なものの見方・考え方、青年の要求や生きづらさのおおもとにある異常な政治、社会をかえる道筋をつかめる科学的社会主義と日本共産党綱領を学び、「かわるかもしれない」「かえられるのでは」という希望の芽をはぐくむ。

第二は、科学的社会主義と日本共産党綱領を学び、「かわるかもしれない」「かえられるのでは」という希望の芽をはぐくむことです。

埼玉県委員会では、3月、4月、6月、8月と、綱領学習をおこない、綱領の1章ずつを読んで疑問をだしあい考えてきました。昨年9月、リーマンショックで経営が傾き、5年3ヶ月つとめた会社を解雇されたある県委員は、綱領を学び、「4章の経済的民主主義の分野は、自分自身に起こったことと重なった。解雇通告された時はとてもショックで涙が出た。中小企業への安定した仕事の供給がされ、正社員が当たり前の雇用、解雇や内定切りを規制していたら、一生懸命働きたい人や中小企業の苦労は生まれなかったと思う。私の願いはルールある経済社会」と話しています。

——要求実現をめざして実際に政治に働きかけ、「声をあげれば政治は動かせる」という確かな手ごたえをつかみ、語りひろげる。

第三に、要求実現をめざして実際に政治に働きかけ、「声をあげれば政治は動かせる」という確かな手ごたえをつかみ、語りひろげてきたことです。

山梨・甲府地域では、班員やまわりの青年に声をかけて5月の青年大集会に参加し、「自分たちの力で社会をかえていける」と手ごたえをつかんでいきました。参議院選挙でも、「あなたが総理」企画や「マニフェスト比較」学習会などをおこない、同盟員への電話かけや青年との対話にとりくみました。この地域を担当している県常任委員は、「いままで『自分の気持ちからのスタート』という感じではなかったけれど、青年大集会に参加して『自分たちのやってきたことは将来に生きる』『自分も変えていけるかもしれない』と実感がわいた。だからこそ青年の模索にむきあえたいし、『本当はこうしたい』という願いを実現していきたいと思えた」と語っています。

このように3つのプロセスを示した上で、決議案は次のように述べています。「私たちは青年に『社会はかわるし、かえられる』との展望をひろげ、“ほんとはこうしたい”という願いから政治を動かすエネルギーをつくりだしてきました。その根本には、青年の願いの実現に力をあわせるとともに、日本共産党を相談相手に科学的社会主義と日本共産党綱領を学ぶという基本的性格の力があります」。決議案の1章(1)の見出しには、「民青同盟の基本的性格が未来をひらく力」とあります。このことが大会後の実践の中で明らかになってきたことを、みんなの確信にしたいと思います。

この1年、民青同盟がきりひらいた活動を、さらに大きくひろげることができるならば、それは日本社会の閉塞感をのりこえ、必ず未来をひらく力を発揮するものとなるでしょう。その民青同盟のかけがえのない魅力と役割に確信をもって、いまこそ大きな民青同盟をつくるために力をつくすことを、心からよびかけたいと思います。

(2) 一人ひとりの願いにこたえる班活動を大切に、要求運動と学習をすすめよう

(2)では、9月の「よびかけ」ではじまっている班活動の強化・発展方向を示しています。班での討議では、自分たちの「やりたいこと」「知りたいこと」を出し合って議論を進めていくところです。報告では、決議案にもとづく班活動を進める上で、機関が果たす役割について述べたいと思います。

一つは、班での討議の際、班員の願いや実態、「やってみたい」という意欲にかみあう具体化のイメージが持てるよう議論に加わるとともに、青年にひらかれた居場所をめざし、青年とともに交流し、学び、行動する班活動をすすめるよう援助することです。これは地域、職場、学園で、同盟員だけでなくまわりの青年の願いにこたえようという民青同盟の目的にてらして大切な努力です。同時にそのことは、2章で述べる大きな民青同盟をつくる上でも新たな条件をひろげることになります。決議案にもとづいて、いまもっている多彩な班プランの具体化・実行を応援しながら、さらにまわりの青年の声にもこたえるものに充実・発展させていくことをよびかけます。

もう一つは、それぞれの班のとりくみを束ねて、自治体・地方議会への要請行動、県・地区単位での青年集会や「つながる講座」、冬の学習交流合宿など、節目をもって要求運動や学習を組み立てていく役割を発揮することです。そうしてこそ、班の一つ一つのとりくみを、社会を動かし願いを実現する力に結実させていくことができます。

●雇用、くらし、平和、米軍基地——国政と地方政治をともに動かす運動を

——雇用とくらしの願いをかかげて

まず、要求運動についてです。今年だけで4万2千人の非正規労働者が解雇・雇い止めにあい、失業率は高止まり、就職難も長期化しています。実態を集めながら、「労働者派遣法の抜本改正、有期雇用への規制を」「就職難の解決とルールづくり」「学費値下げと奨学金・学費免除制度の拡充」などの要求で政府に実行を迫っていく流れを大きくしていきたいと思います。同時に、地方自治体にも、「公契約条例による賃金アップ」「地域の雇用創出」「家賃補助制度の創設」「消費税増税ストップの意見書採択」など要求をぶつけていくとりくみを広げます。

東京では、地域ごとに各自治体への要請行動をしよう提案し、11月には都委員会として都庁要請行動を計画しています。香西都委員長は「あまり構えずに気軽にやろうと呼びかけました。みんな

なにイメージを持ってもらうために、今わかる範囲の声を持って行ってぶつけようと思っています」と話しています。就職難の問題では、日本共産党・笠井亮衆議院議員が行った就職難についての国会質問を載せたビラを10万枚つくって、実態を集めていく計画です。また、12月5日には実行委員会主催でおこなわれる「やっぱおかしい日本のシューカツ！？学生が本音で語ろう！就活シンポ」にも参加しようとしています。京都でも、12月5日に雇用シンポジウムを計画しています。それにむけて、「若者に安定したやりがいのある仕事を！学生に学ぶ時間と就職を！」をテーマに、働き方や就活の実態、人生プランや政治へ求めることを尋ねる「わかものアンケート」をつくり、目標1000人で議会を動かそうと対話行動を今月から始めています。就職難の問題では、就職や進路をめぐる不安や悩みを交流でき、「自分のやりたいこと」をともに考える場をつくり、希望の仕事に就くことをめざして励ましあう活動をすすめることと一体に、大企業優先の政治の異常について学ぶことを重視します。また会社説明会や就職セミナー、大学での実態調査にとりくんで、就職活動の実態を告発することが大切です。全学連が12月17日に計画している国会要請行動、18日の集会には、ぜひ学生が実態をもちよって参加してほしいと思います。

青年大集会にむけた団体との共同も生かしていくことが大事です。今年のはじめて県内の青年大集会実行委員会を結成し、集会にバスで参加した群馬では、その後も実行委員会を月1回つづけています。9月末の実行委員会では「来年の1月にある春闘討論集会に青年分科会をだそう」と今後のとりくみも計画しています。愛知では、青年大集会にむけていっしょにとりくんだ「つながればかえられる」実行委員会で民青新聞の学習のページをつかって、「地方政治と青年の願い」について学び、県知事選挙に向けての議論をはじめています。

——沖縄基地問題で「全国いっせい行動」を

次に、米軍基地問題についてです。11月11日から一週間、「米軍基地撤去を求める全国いっせい行動」をよびかけました。基地撤去の声を日米両政府につきつける大きな山場となる沖縄県知事選挙のたたかいと連帯し、「沖縄の声を無視しないで」「米軍基地の押しつけはやめて」という全国の青年の声を社会にアピールすることをよびかけます。具体的には、シール投票と一言メッセージで声を集め、中央委員会で集めて沖縄にも日本政府にも届け、青年の世論を示します。同時にこのとりくみを、3中委決議を力に、青年の模索によりそった米軍基地撤去の運動、日米安保条約廃棄の運動をつくる一歩にしたいと思います。宣伝グッズでは中央青学連が作成したパンフを活用しましょう。

先日、中央委員会では民青新聞の取材も含めて渋谷駅前でも3度の対話宣伝を行いました。対話に使ったシールボードでは、2つのことを聞きました。1つは、「沖縄の人は基地撤去を求めているがどう思うか」です。これについては「沖縄の人を支持する」が約半数を占め、「支持しない」「わからない」という人を上回りました。この質問では、沖縄の基地の苦しみ、基地撤去への思いをリアルに伝えれば、ひろい青年と一致する条件があるだけに、ぜひ一言メッセージを集めましょう。同時に、2問目に「日本に米軍基地は必要だと思うか」と訪ねると、圧倒的に「基地は必要」にシールを貼る人が多い結果となりました。ある高校生は「基地が沖縄県民だけの負担になるのはおかしいけど基地は必要。抑止力を持たないと」と考えていたので、世界では紛争を話し合いで解決する流れがひろがっていること伝えると、「軍事は必要だけど、自分も本当は戦争を肯定したくない。話

し合いで解決できるといいですね」と話してくれました。この質問では、青年の「ほんとは基地や戦争がなくてすむならいいけど」という思いに共感しつつ、展望を伝えることを重視したいと思います。

なお、12月3日から長崎・佐世保で行われる平和大会も、学び交流する機会にしましょう。

——要求実現の根拠と展望をしめす努力を

要求運動を進める上で、1章（1）で明らかにされている模索によりそい展望をひろげる活動姿勢を生かして、要求実現の根拠と展望をしめす努力をすすめることが大切です。

日本共産党綱領や第25回党大会決定・2中総決定の内容を生かして、「どうしたら正社員を増やせるのか」「米軍基地がなくても日本の安全は守れるのか」などの声にこたえることが大切です。また、「民青新聞」や「前衛9月号」の川田忠明さんの論文など青年の模索や運動にひきつけて学べるアイテムも重視します。中央委員会も対話や交流を進める際、わかりやすく展望を学べるグッズも探求したいと思います。

青年大集会ダイジェストDVDなども活用し、青年の運動で政治を動かしてきた実感を生き生き伝えることも大切です。岩手では10月6日、岩手県議会の商工文教委員会で、岩手青年集会実行委員会が出した「青年の生活と雇用を守り、将来に希望がもてる岩手県の実現」を求める請願・陳情が審議され、一部の請願を除いて可決、採択されました。実行委員会では、6月に岩手青年集会を行うとともに440人分の青年の実態を示しながら県議会への要請・陳情をしてきました。「企業も大変なんだから」といた自民党の議員も、440人分の声を前に「これは大変なこと」と認めざるを得なかったそうです。2003年から行ってきた全国青年大集会をふり返ると、私たちは分断と“自己責任”の考え方に立ち向かい、青年の実態を告発し、「苦しいのはあなた努力の問題じゃない」「本当はどんなふうに働きたいのか」と語り合いながら、青年の貧困と雇用破壊を大きな社会問題に押し上げてきました。核兵器廃絶についても、毎年の原水爆禁止世界大会を節目に被爆の実相を学び、署名を集めてきました。それらの運動は、核兵器禁止条約が国際政治の現実の課題になるところまで世界の流れをつくってきました。こうした手応え、実感をおおいにひろげていきましょう。

●綱領・科学的社会主義の学習——「綱領・古典の連続教室」を生かして

次に、綱領・科学的社会主義の学習についてです。「県委員会で『フォイエルバッハ論』を読む朝学をはじめた」（千葉）「月1回、綱領学習をつづけている」（埼玉）など、各県・地区委員会が、同盟員によびかけて綱領と科学的社会主義を学ぶとりくみが行われています。また、「よびかけ」や「学ぶ つながる かえられる講座」の参加者の意欲を生かしたとりくみもひろがっています。

講座に参加した大阪・西淀此花地区の地区委員は、帰ってから地区で「綱領の講義を聞き、自分がなんで活動をしてきたのか意味がわかった。昔、自分は、『日本はもうあかん。海外へ行こう』と思っていたけれど、社会の歴史や今の情勢、未来社会への展望を学んで、1つずつ、今の困難を乗り越えて前進していけると思ったんだ」と感想を話しました。地区のメンバーは彼の話しをうけて、「『つながる講座』の西淀此花版をやろう。学びを通じてつながりをつくろう」と議論し、地区で「ハッピー学習会」を計画しています。また、大阪では、府委員会としても11月に石川康弘さんを講師に招いて「大阪・学ぶ つながる かえられる講座」を計画しています。

機関として重視したいのは、こうした県・地区委員会での学びをさらにひろげるとともに、日本共産党がひらく「綱領・古典の連続教室」への参加・視聴をすべての班・同盟員によびかけていくことです。月に2回、充実した学びができることは、同盟員の成長や生き方をはぐくむ上でも大きいものがあります。決議案にあるように、夕食交流会やしゃべり場、クイズなど、大会決定第3章で述べられている楽しく多彩な学びのイメージで、「自分たちのつどい」にしていきたいと思います。また独自のチラシも作って魅力的なうちだしやキャッチフレーズをつくって参加を募っていくことも大切にしたいと思います。

なお、中央委員会として学習材料を作る努力を強めたいと思います。この間、民青新聞の「いまマルクスがおもしろい」の記事も反響をよび、全国各地で活用されています。年金や国の財政など1・2面に掲載される「そもそも」がわかるシリーズも、青年の疑問や気になることからわかりやすく綱領が示す展望に迫れるものとして好評です。これから学習のページでも青年の模索にひきつけて綱領を学ぶ連載がスタートします。

以上が、決議案第一章についての説明です。(1)で述べた青年の願いや模索、情勢と民青同盟の役割、(2)で述べた今後の活動の強化方向はバラバラではなく、全体に「青年の模索によりそい展望をひろげる」という今日の民青同盟のかけがえのない役割が見えるようにしました。そこをよくつかんで、今後の活動にのぞみたいと思います。

2、未来をひらく大きな民青同盟をめざして

●知恵と力をあわせて組織づくりの前進をめざそう

次に第2章、民青同盟の組織的前進をめざす方針についてです。

全国大会後、各県の代表者会議で「私にとっての民青」「民青をひろげたい」思いを交流し、新入生・新入職員歓迎運動、全国青年大集会、参議院選挙などにとりくみながら、青年との結びつきをひろげ、700人をこえる新しい仲間を迎えてきました。また、全国で10地区が再建され、現在地区委員会は73地区になっています。しかし、同盟員拡大では昨年同時期の拡大数も上回ることはできておらず、第34回全国大会で掲げた目標——「次の全国大会を、第34回大会の同盟員現勢を上回って迎える」「全国で地区委員会の再建をめざすとりくみを本格的に前進させる」という目標に照らせば、思い切った挑戦と奮闘が必要な状況です。

同時に、友人や同僚を次つぎと誘って仲間を迎えている班や、近年にない前進・飛躍を勝ちとっている県・地区委員会も生まれています。また、決議案で冒頭に述べられているように、一回一回の班会議をなにより大切に、出された声の一つ一つ実現していく努力を積み重ね、青年の願いや模索に深くねざして活動する民青同盟をつくってきたことは、多くの新しい仲間を迎えていく条件と可能性を一步一步着実にひろげています。「仲間が増えていない」「できていない」と感じる面もたくさんあるかもしれませんが、大会から1年、自分なりに努力したことも、そのなかで生まれてきた班や同盟員の成長や青年との結びつきなどもあるのではないのでしょうか。

そこで、中央常任委員会としてまずよびかけたいことは、自分たちが、苦労がありながらもがん

ばってきた活動をふりかえり、前進の芽も、また現状打開が求められている点や今後の課題もリアルに見て、どう組織づくりを進めるのか、どう生まれている前進の芽を実際的前進に実らせるのか、みんなで真剣に考えようということです。中央常任委員会もこの3日間、ともに考えたいと思います。そして、全国の経験と教訓、努力も苦勞もありのままを交流し、知恵をしばり、前進への方針を中央委員のみんなの心をこめて練り上げることを、よびかけたいと思います。

(1) 機関としての同盟拡大の努力

第一に、決議案にもとづく同盟拡大をどうすすめるか、またそのなかで機関が果たす役割は何かを考えたいと思います。

●同盟拡大をみんなでとりくむ活動に

決議案は、班の魅力を輝かせることをこれからも大切にするとともに、仲間を増やし、大きな民青同盟をつくるために知恵と力を合わせようとよびかけています。

各県からよせられた経験や悩みの中には、「拡大は自分だけしか意識してない」「仲間を迎えることは班プランのテーマにならない」「民青の魅力は語られても、仲間を増やそうとはならない」「結びつきはあるのに、民青に迎える対象者と思っていない」「班会に青年が来ているけど、加盟をよびかけようとはならない」などの声がありました。どうやって、同盟拡大をみんなでとりくむ活動にしていけるか、どう一人ひとりの結びつきを生かしていくのか——ここに第一のポイントがあると思います。そこで決議案2章(1)では、なぜ仲間を迎え、大きな民青同盟をつくるのが大切か、班と同盟員の目線から考えられるように丁寧に述べられています。

——青年の願い、模索と結んで民青同盟の魅力を考える

2章(1)では、まず「みなさんのまわりの青年はどんな実態や願い、模索をもっていたでしょうか」と問いかけ、『よく知らないな』と思ったら、ぜひ実態アンケートや同盟員アンケート、署名や折り鶴を使って聞いてみるのが大切です』と述べています。その上で、「青年にとって民青同盟に加盟する意味」、「社会にとって民青同盟が大きくなる意味」を考えられるものになっています。

これは、「魅力の交流だけでは仲間を迎えようとならない」、あるいは「まわりの青年・学生は、仕事や学費に困っているように見えないし、政治のことも考えていないから話せない」などの声をふまえたものです。「自分にとっての民青の魅力」とともに、具体的に結びついている青年がどんな実態におかれているか、どんな要求をもっているか、どんな関心や模索を深めているか。それが見えてこそ民青に迎えたい対象者となり、一人ひとりがもっているつながりが「民青同盟員としてのつながり」になるのではないのでしょうか。そして願いや模索が見えてこそ、班の拡大の議論も抽象的なものではなく、具体的に自分たちがとりくむテーマとして議論できると思います。

兵庫・尼崎地区委員会のある地区委員は、ファーストフード店で友だちから「進路で悩んでいる」「派遣切りのことを考えると将来が不安だ」という不安や模索を聞いたことをきっかけに、「民青やったら情報も知れるし、学べるよ」と地区の集まりに誘いました。中央常任委員会からの「よびかけ」をいっしょに読むと、「専門学校をやめようと思っている」「消費税増税は仕方がないのかな」

などの模索が出されたので、後日、彼の疑問や関心にこたえて「消費税学習会」を行って仲間に迎えました。この地区委員は「普段から話すなかで、学校や将来のことを悩んでいることを聞いてきた。民青やったら、彼の不安や疑問も解決できるし、何か見えるものをつかんでもらえるかもしれないと思って誘った」と話しています。

——リーダー自身の「大きくしたい」「仲間を迎えたい」思いを大切に、決議案で“率直に”、“丁寧に”議論を

次に、この（１）の議論をすすめる機関としての役割についてです。

機関のメンバーも、「拡大を提起したら引かれるんじゃないか」など、班での議論を提案すること自体に不安とためらいがあったり、「班会が魅力的じゃない班は、仲間を迎えようなんて思わないはず」などの思いをもっていることもあります。そのとき「班に何をやらせるか」「どうやったら議論がうまくいくか」ということを出発点に考えるのではなく、まず県・地区委員会や班のリーダー自身が、「仲間をひろげたい」思い、「民青を大きくしたい」思いを交流し、言葉にしていくことが大事です。そして班に入ったときも、その自分の思いを大切に、「自分はこんな思いで民青の仲間を増やしたいと思っているけど、みんなはどう？ この3中委決議を読んでいっしょに考えたい」と言ってみるところから議論がスタートするのではないのでしょうか。これは中央委員・県委員長と県・地区委員会との関係でも同じことが言えると思います。

拡大の経験がない同盟員も多く、本音で語り合える人間関係をつくるのにも苦労があるなかで、疑問やためらいが出たとしても、それは当然のことです。その疑問やためらいを交流していくところから、班や同盟員が「自分にとっての民青」に向き合い、「自分たちはどうしたいのか」「何ができるか」を考えていくなかで班の結束も強まり、一人ひとりが成長することも少なくありません。

愛知では9月の学生交流会で、「よびかけ」を議論すると、ある学生同盟員から「班員が増えたらいいと思うけれど、『よびかけ』で拡大ばかり言いつぎなのではないか」という疑問が出されました。そこで「みんなは拡大についてどう思う？」と話し合うと、他のメンバーから「学費の高い私立大学しか入学できなかった自分を責めて苦しんでいたとき、民青に出会い、『自分のせいじゃない』と気づくことができた」などの思いが語られました。すると「拡大の意味がわからない」と言っていた同盟員も、「今回初めて議論したけれど、自分やみんなの『民青を大きくしたい』思いを交流するのは大事だと思った」と話してくれたそうです。

これらの経験に学び、「率直に提案する」、同時に、「疑問が出たら丁寧に議論する」ということ、「率直に」と「丁寧に」を大切に、同盟拡大を班プランのテーマにしていくことをよびかけます。

——目標をもって活動する大切さ

決議案では仲間を迎える目標をもってとりくむことをよびかけています。

「目標という数字でつめられるイメージ」「ノルマみたいで嫌」「成果を焦らされるから決めたくない」「そもそも目標はいらぬのでは」などの声もあります。県委員会や地区委員会でも、「班や地区への押し付けにならないか」という思いがあります。こうした気持ちの背景には、青年が学校でも職場でも点数や成果で競争させられる今の日本社会のもとで傷ついてきた体験があります。私たちはそうした社会をかえるためにともに力を合わせている仲間であり、その思いを受けとめ、

民青同盟が成果や数で人間を競わせ、追い詰める場にならないようにすることは大事です。

同時に、目標とは本来、自らの自発的な思いでつくるものであり、それ自体が自動的に押し付けになったり、成果の競争になったりするものではありません。目標をたてることは、“めざすもの”を仲間との共通の思いにし、その目標の達成をめざして努力を重ね、みんなで成長していく力になるものです。また、目標を達成したかどうか、いい結果が得られたかどうかに関わらず、その目標に向かうプロセスのなかで、新しい挑戦にふみだし、その後の活動への教訓も見えてくるなど、目標をもって力をあわせたことから次につながる財産も生まれます。決議案にあるように、“自分たちはどんな民青をめざすのか”を交流し、“やらされる”目標ではなく、“やりたい”目標をつくって活動するスタイルをひろげていく、そして目標達成に向けて努力したことそのものをお互いに喜び合い、励ましあう関係をきずくことが大切です。

いま全国的には、卒業などで減少する同盟員数を上回る仲間を迎え、民青同盟が全国大会ごとに大きくなっていく目標——現勢回復と地区委員会再建を本格的に進めることをめざしています。その大会でかかげた目標の達成をめざし、9月のよびかけにもとづいて2010年末までの節目標をたて、仲間を増やして2011年を迎えることをよびかけます。

●実際にどう仲間を迎えていくか

第二のポイントは、実際にどのように仲間を迎えていくのかについてです。仲間を増やしたことや、自分以外の青年が加盟した場面にたちあつた経験のない同盟員も少なくないだけに、意欲はあっても「何をしたらいいかわからない」ことも多いと思います。そこで決議案では、できるかぎり具体的に仲間を迎える努力の中身を記述するとともに、「県・地区委員会のリーダーや経験のある同盟員、日本共産党と相談し、知恵と力を合わせる」ことを強調しています。この具体化をする上で、機関として何を大切にしていくか、考えたいと思います。

——県・地区委員会自身がふみだしながら、同盟員の成長を支え、仲間を増やす班を育てる

まず、決議案2章(2)にあるように、仲間を増やす活動は“歯をくいしばってやる”ものではなく、「楽しくやりがいのある活動」です。実際に、初めてとりくむ同盟員も、ちょっと友達に民青同盟のことを伝えてみたり、他の同盟員とわいわいしゃべりながら訪問行動に参加したりして、「他の人も自分と同じような悩みをもっていることがわかった」「民青の魅力を伝えられてうれしかった」など、同盟拡大にとりくんだこと自体が楽しかったと思うことは少なくないのではないのでしょうか。県・地区委員会でも気軽に「やってみる」こと、実際にとりくんでみた経験やおもしろさを交流することが大切です。うまくいかないことや壁にぶつかっても、みんなで相談し、励まし合っていくことが大切です。そして県・地区委員会が実際に足をふみだしつつ、同盟員の成長を支え、仲間を増やす班を育てていきましょう。

滋賀県委員会は、今年に入ってすでに前年の拡大数の2倍を超える仲間を迎え、学生班、職場班の2つの新たな班を結成し、大きく前進しています。まず県委員会自身が「県内の各大学に班をつくりたい」「現勢を回復して一年を迎えたい」と議論し、だれにどう働きかけるかを毎回の会議で相談し、そこに班員も誘って、同盟拡大にとりくんでいます。先月は、以前は企画に友達を誘うのをためらっていた地域班の班員と訪問行動にとりくむと、訪問の後半から自分から魅力を話しはじめ、

帰り際には「自分も友達に声かけてみようかな」と言いました。佐藤県委員長は、「班では仲間を増やすことが大事だとなってからもうワンステップ必要。対象者が見えたり、実際に行動して、機関が経験をいっしょにつくること。『よびかけ』でいっている小さな一歩を大切にすること」だと話しています。

——不安やためらいを乗り越え、率直に加盟をよびかける

実際に仲間を迎える上で、次に強調したいことは、不安やためらいを乗り越え、率直に加盟をよびかけていくことです。多くの県で、「班会に誘ってきても加盟をよびかけられない」「雰囲気壊すんじゃないか、断られたらどうしようという不安がある」「加盟をよびかけるのは強制しているみたいで嫌だ。自然に入るまで待つべきだ」という意見がある」などの悩みがあります。

まず、大切なことは、そうした声にぶつかったときに、「仲間を迎えることの意味」「大きな民青同盟をつくる意味」をあらためてふりかえり、確かめ合って、加盟をよびかける一歩を支えあっていくことです。同時に、「加盟をよびかけること」＝「加盟を強制すること」ではありません。加盟の決意はそもそも本人の意志で決めるものであり、大事なものは、相手の願いや関心をよく聞くことと合わせて、「自分が加盟してよかったこと」や「あなたと活動していきたい」という思いを素直に伝えていくことです。班会や企画に参加してくれたり、民青同盟のとりくみを聞いてくれた人は、「ここはどんな団体なのか」「自分は仲間に入れるのか」「なんで自分の友達はこの団体に入っているのか」などを知りたがっていることも少なくありません。“ほんとは仲間になってほしい”という本音を隠さず伝えてこそ、自分も相手も大切にすることであり、お互いの関係もより発展するのではないのでしょうか。

東京・板橋地区委員会では、赤旗まつりにむけて、カレーを食べながら青年の実態を交流しようと、「カレー青年実態交流会」を企画し、そこに昨年とりくんだ若者実態調査アンケートでつながった青年を誘って、仲間を迎えています。このとき、高校生相談員をやっている地区委員が加盟をよびかけました。彼女は「とてつもなく人見知りな私には気が重かった」そうですが、「せっかく来てもらえたし、何もせず帰ってしまうのは惜しい」「地域班が活性化すれば、高校生班のサポートにもつながる」と、自分の「仲間になってほしい」という思いを胸に、地区委員長といっしょに「知る会」を行いました。そこで、好きなマンガの話や板橋地区のこれまでの活動を伝え、加盟書を差し出してみると、「あ、はい」と書いてくれ、「民青でもっと交流したい」と言ってくれました。よびかけた地区委員は「今回のことで少し自信がついたので、次は高校生を迎えたい」と話しています。東京都委員会では、「班会に誘うだけでなく、加盟をよびかけることを大事にしたい」との思いで、民青同盟の「知る会」を“相手の願いや関心を知れる”“民青の魅力を知ってもらおう”という2つの“知る”ができる場として重視しています。

——青年・同盟員に「民青新聞」「われら高校生」の購読を

決議案では、機関紙活動について、同盟拡大のところで述べて、購読をよびかけていくとともに、配達・集金に力を合わせることをよびかけています。

大阪・木津川南地区委員会は、仕事が忙しく班会には参加できていなかった同盟員にねばりづよく働きかけ、9月の班会で民青新聞「いまマルクスがおもしろい」の記事で学習していました。10

月の班会で、地区副委員長から「班会でも使っているし購読して欲しい」とよびかけると購読してくれました。また、東京都委員会では、『民新』『われ高』をもっと多くの仲間や青年に読んでもらおうと、機関紙の購読をよびかけることにこだわって、3月から7月までの5ヶ月連続で増勢をつくってきました。10月には、「機関紙活動交流会」をおこない、機関紙活動のやりがいや苦勞、経験を交流するなどの努力も始まっています。

（2）高校生分野——「アピール案」にもとづいて、体制強化と新たな高校生班の結成を

次に、高校生分野のとりくみについてです。この3中委の議題として、県・地区委員会、高校生相談員、高対部にむけた「アピール案」を出しました。これには2つの趣旨があります。

一つは、高校生の仲間を増やし、班をつくることは、高校生の切実な願いにこたえ、生きることのよろこびをひろげる上でも、民青同盟と青年運動の未来を担う次の世代をつくる上でも、特に重要な意味を持っているからです。そして、高校生の人間的成長を支えるには、班活動を日常的に援助する相談員はもちろん、県・地区委員会の総力をつくすことが大切です。いま同盟員の生活実態などによって援助体制を確立することにも苦勞があり、県委員長や高対部長、相談員が一人ぼっちの奮闘で高校生班を支えているところも多いだけに、この「アピール」の討議で、援助体制の確立・強化をはかる流れをつくりたいと思います。

二つは、民青同盟高校生班の現状に照らしてみれば、いま高校生分野の前進をめざすには、高校生自身の意欲や行動とともに、県・地区委員会や相談員、日本共産党の協力もおおいに得て、仲間を増やして新しい班をつくる大きなカギを握っているからです。現在、高校生班がない県・地区が増え、いま新しい班の結成・再建をめざす努力が必要です。同時に、高校生班の結成は特別に難しいことではなく、高校生の願いにこたえ、前向きな意欲を引きだす努力をしていけば、短期間でも次つぎ仲間を迎え、前進をはかれる分野でもあります。

この3中委で高校生分野の経験や教訓をおおいに交流し、「アピール案」を練り上げ、具体化をはかりたいと思います。

●県・地区委員会の体制強化、「高校生応援チーム」をつくる

具体化の第一は、すべての県・地区委員会で「アピール案」を討議し、「高校生応援チーム」をつくることです。高校生班がないところも、「高校生同盟員がいないし、関係ない」「高校生が増えてから…」ではなく、応援チームをつくって、前衛09年6月号（田中論文）や全高集報告集を学び、どう高校生の願いにこたえ、仲間を増やしていくのか相談をはじめることが大切です。「アピール案」の1章では、高校生にとっての“お兄さん”“お姉さん”、大人の存在意義と高校生を支える活動のやりがいを明らかにしています。これを活用し、地域班、職場班、学生班などのメンバーも視野にいれ、条件と可能性をくみつけて相談員の複数確立をめざすとともに、日本共産党にもおおいに協力をうったえることが大切です。

神奈川・県央地域のブロック会議では、「高校生班が地区再建のきっかけになると思う」「ぼくは班のない地域に班をつくるのがいいと思う」と出され、2つの地域班と高校生班の再建を地区再建の目標にすることになりました。会議の中で役割分担をして「いいだしっぺだから」と学生県委員のTくんが高校生担当になりました。神奈川では高校生班の班会開催に苦勞もあるなか、県委員

会が「相談員さんのホッとできる相談の場をつくろう」と、高校生分野に興味がある人にもひろくよびかけて、7月から「相談員交流会」を月1回開催しています。そこに県央ブロックのTくんもさっそく参加しています。Tくんは高校時代、自分の学校の校則を変えようと活動して実際に変えた経験があります。「何度もやめようと思ったときに班会で話したら『応援するよ』と言ってくれ、心の支えになった」「高校生で一番大事にしたいのは『3スピ』。30分でも1時間でもいいから毎週必ず集まってやりつづけたい」と、これからの決意を話しています。

●仲間を増やし、新しい班の結成をめざす

第二に、具体的に高校生のつながりをだし合い、来年3月の全高集をめざして、「アピール案」2章で提起している3つの活動にとりくむことです。

大阪・枚方交野地区委員会では、4月の地区代表者会議で「高校生班を結成するためにも、高校生の仲間をむかえよう」と話し合い、5月に3人の仲間を迎えて高校生班を結成しています。地区のメンバーで行った訪問行動では、はじめ2人の高校生に会うことができ、「友だちにうつ病の子がいて『リストカットしている』とメールがくる」などの実態を聞きました。「民青紹介DVD」を見て加盟をよびかけると、「話をするのが好きだから『3スピ』してみたい」「食べ物企画をやってみよう」と2人とも加盟してくれました。その後、できた準備班で班会を行うと、班員が友だちをつれてきており、「いじめられて不登校になり、親からも『学校に行かないなら働け』といわれる」という悩みも話してくれ、「仲間は多いほうが楽しいし、いっしょにやろうよ」とよびかけて仲間を迎え、一気に高校生班が結成されました。

なお、中央委員会としても、県・地区で使える高校生応援プラン用紙を作るとともに、高校生の結びつきをひろげ、仲間を迎える力になるグッズを探求し、作成したいと考えています。

●現在活動している高校生班の方針について

現在活動している高校生班の方針についてですが、高校生も基本は、3中委決議案の学習と具体化を進めます。アンケートなどを使って、高校生の就職・進路の不安、大学の高学費の問題、原水爆禁止世界大会のとりくみなどにひきつけて学習するとともに、「知りたいこと」「やりたいこと」を出し合い、まわりの高校生とともに一つひとつ実現する班活動を進めます。また2章を読んで、新しい仲間を迎える活動に、相談員や高校生応援チームのメンバーとともに足をふみだしていくことが大切です。民青同盟の魅力をふりかえり、班プランをつくる上で、民青紹介ビデオや「われ高」、班プラン用紙を活用しましょう。

(3) 学生分野——3中委決議案を力に、大学での班活動の発展を

次に、学生分野のとりくみについてです。

「貧困の解決に何が必要か、資本主義はこのままでいいのかを考えたい」など、“社会の根本を知りたい”という関心、「就職が不安で夜も眠れない」「学費が高い上に就活の交通費で40万円かった」など就職難、高学費のもとでの切実な実態、「大学では当たり障りのない話しかしない」など人間的交流を求める思いなど、学生の願いや模索はあふれています。それだけに、「フリマでお金を集めて沖縄フィールドワークへ」（福岡）「フォイエルバッハ論の学習をはじめた」（大阪）「焼き肉

交流会で楽しく食事」(愛知)など、学生班の多彩な活動が魅力となり、学生に共感をひろげています。東京では、各大学でガイダンスや学習会をひらいて、街頭生活相談を行う「貧困ボランティア」を募集してきました。2008年から46回おこなってきたこのとりくみには、のべ220人以上の学生が参加し、そのなかから加盟者も生まれています。

同時に、今年の新入生歓迎運動とこれまでの学生班の組織づくりの到達は、昨年同時期と比べても遅れています。学生班は、基本的に4年サイクルでメンバーが入れ替わるだけに、次つぎと仲間を迎え、班活動を発展させる系統的な努力が大切です。また、学園に大きな民青同盟をつくることは、学生の願いや模索にこたえる上でも、民青同盟と青年運動、日本の未来の担い手をひろげるためにも重要です。3中委決議案にもとづいて学生班の魅力ある活動をつくり、仲間を迎えていくために、機関として以下の点を大事にしたいと思います。

●周りの学生の要求に目を向けた班活動をつくる努力

第一は、自分たちの要求とともに、周りの学生の実態や要求に目を向け、それにこたえる魅力的な班活動をつくる努力です。

東日本のある大学班では、今年の新歓まで2人だけの班会でした。しかしその2人の班員が、大会決定を読んで、「学生同士の関係が冷たいのではないか」「班員の要求が見えていなかった」と率直に議論し、「出された声は必ず実現しよう、班員以外の学生も気軽に参加できる班にしよう」と話し合ったことをきっかけに、学生自身が中心になって班の運営をはじめました。新歓では、「学力を考える討論会」をひらき、自分たちで食堂にチラシをまくなどの行動にもとりくみ、企画にきた2人の学生を仲間に迎えています。いま班では係もきめて班活動を進めています。

こうした経験に学び、3中委決議案の討議も、単に「やりたいこと」を出し合って班プランをつくるだけでなく、いまの民青同盟の魅力や役割、「自分たちがどんな班をめざすのか」をよく議論していくことが大切です。

学生の就職難と過熱する異常な就職活動は、大きな社会問題となっています。「授業も卒論も犠牲にして就職活動に追われている。自分は学ぶために大学に来たのに」という学生の痛切な声があふれています。大学人からも、親や祖父母からも、「これから社会に出ようとする若者をこんな目にあわせる国に未来があるのか」との声があがっています。当事者である学生自身が「変えよう」と声をあげることが求められています。また、いま大学は大学予算の大幅削減の危機に直面し、学長が街頭に出て署名を集める、大学当局が学生によびかけ緊急決起集会を開き、政府への意見提出をよびかけるなど、かつてない動きになっています。学生のなかでも「学費減免が受けられなくなると、大学に通えなくなる」「大学がこんなにボロボロなのに予算を減らすなんてひどい」などの怒りがひろがり、民青同盟や学生自治会が学習会や署名をよびかけると大きな反響が返ってきています。学生の知的関心もひろがっており、大学生が「正義」を正面から語り合う哲学の講義が注目されたり、マルクス『資本論』をNHKが取り上げるなどの動きがつづいています。

学生をとりまくさまざまな問題を、民青が取り上げ、まわりの学生によびかけていっしょに運動したり、学びと交流の場をつくったりしていくことに、ぜひ挑戦していきたいと思います。少人数の班も多いだけに、都道府県ごとの学生交流会も重視しましょう。班会議や交流会の場で、「学生の実態はどうなっているか」「どんな要求があるか」「民青でどんなことをしたいか、どんなことがで

きるか」を話し合い、「学費ゼロネットをつくり、全学連の国会要請行動に参加する」「インカレ資本論ゼミを開講する」「環境フィールドワークツアーをやってみる」など、魅力的な活動を具体化しましょう。

●綱領と科学的社会主義を学び、知的確信をつかむ努力

第二は、学生分野では、綱領と科学的社会主義を学び成長することを、班活動のなかで特別に重視することです。これは、学生班で同盟拡大を進めていく上でも、一番の鍵になります。学生班では、「日本共産党のことを言えない」「まわりの人は政治のことなんて考えていない」などの声もあります。「率直に」と同時に「丁寧に」の立場で、綱領や科学的社会主義の学習で、まわりの人をどう見るのかや、社会をかえる展望、自分の生き方の指針をつかむこと、民青同盟の基本的性格への確信をはぐくむことに力を注ぐことが求められています。

中部のある大学は、9月末に合宿をひらき、学生自治会の活動にとりくんでいた学生を誘って、サイコロトークで交流するとともに、綱領の全文と、民青新聞の石川康宏先生の連載『マルクスはおもしろい』をみんなで読み合わせ、じっくりと学んだそうです。このとき加盟をうったえた学生の県委員は、同盟拡大について最初のころは「班会に人が多い方が楽しいだろうな」くらいの思いだったそうですが、「綱領や科学的社会主義を学ぶ民青だからこそ、民青がなんでも話せる場になり、社会を変える展望がつかめるなど、民青の役割が見えてきたから、自分も『いっしょにやりたい』と言えたのかも」とふりかえています。

関東のある大学班では、「バイトや就活で追い立てられるなど学生をとりまく困難な現状があるなか、また、メディアや大学の講義を通じてゆがんだ情報も流されるなか、同盟員が元気に活動していくためには、綱領と科学的社会主義を学ばなければ」と、日本共産党の援助を受けて、加盟したすべての同盟員が空きコマを使って綱領と科学的社会主義を学んでいます。マンツーマンも含め、自分の専門分野にもひきつけて面白く学ぶ努力をしているそうです。それが年間通じて仲間を迎える力にもなっています。

「綱領・古典の連続教室」が始まるという絶好の条件も生かし、すべての学生同盟員が綱領と科学的社会主義を学ぶ民青同盟の魅力を実感できるようにしていきましょう。

●年間を通じた援助体制を、日本共産党とともに

第三は、年間を通じた援助体制を日本共産党と力を合わせてつくることです。日本共産党は第2回中央委員会総会で、「学生分野での党と民青同盟の建設のために、“全党の潜在力”を結集して取り組む」ことをよびかけました。日本共産党の県・地区委員会とともに、国会議員・地方議員や民主的教員の方とも協力し、学生班への援助をつよめましょう。

すでに各地ではじまっている推薦入試で宣伝・対話にとりくみ、加盟をよびかける経験を積んで来年度の新歓に向かうことも重視します。関東のある大学班では、班LCで「後期になって新たにサークルを探している人や、大学生活を考え直している人がいるはず」「他のサークルも秋に新歓をやっているところがあるよね」という話しになり、『大学生活半年間をふりかえてどうですか？新しく何か始めたい、なんかイメージと違った、というあなたへ、秋新歓！』と打ちだし、公開班会や説明会活動をひらくと、紹介したチラシを見て、5人の学生が参加してくれました。「社会のこ

とに触れる場がない」「どうしたら大学の勉強がおもしろくなるのか」と模索する学生に、1年生同盟員が「沖縄スタディーツアーで現実に触れた」「先輩にやってもらった試験対策勉強会が本当に助かっている」と魅力を語ると3人が加盟しました。

中央委員会は、先日ひらいた学生担当者会議を今後も定期的につづけるとともに、今年12月27日(月)～29日(水)の日程で、学生研修会(仮称)を東京で開催する予定です。ここは、綱領や科学的社会主義を学生の願いや模索、生き方にひきつけて学び、民青同盟の魅力や役割を実感できる場にするとともに、全国の学生同盟員で交流し、来年度の新歓への前向きな意欲ももてる研修会にしたいと考えています。学生同盟員にぜひ参加をよびかけましょう。

(4) 地区委員会再建と県・地区委員会活動

次に地区委員会再建と県・地区委員会活動についてです。

●地区委員会再建への展望をどうひらくか

まず、地区委員会再建の展望をどうひらくかについてです。決議案は、班が少数のところや、班活動に苦勞している地域でも、「リーダーの輪をつくり、地域協議会をひらいて班活動の交流・相談をはじめること」、「大会決定や中央方針をみんなで討議・具体化・実践する活動経験を重ね、新しい仲間と班を増やし、地区再建をきりひらく」ことを強調しています。

8月1日に地区を再建した岡山・倉敷地区委員会は、1月の地域協議会から、班の人も巻き込んで班活動の様子や人間関係の悩みを交流し、各班の班会議の開催を大切にしました。また、地域協議会で、温泉合宿や「大人の本気のケイドロ大会」、「民青はどんな組織か」の学習など、「やりたいこと」を一つひとつ実現していきました。参議院選挙や青年大集会に向けて宣伝やお仕事アンケートにとりくんだり、選挙プランを協議会で話し合い、自分たちの共通の目標をもって活動し、再建までに7人の仲間を迎えてきました。地区委員長は、「地区をつくってみて気づいたのは、『地区委員会』はどこか遠くにあって、がんばって近づいていく目的ではない、今の班、同盟員を大切にしていって、やりたいことを自分たちらしく実現していくなかでつくっていくものなんだということでした」「34大会決定に沿って地区の報告をつくと、スムーズに活動をふりかえり、たくさんの同盟員の姿を反映させることができました。それは地域協議会や班が大会決定を実行してきたということだと実感しています」と話しています。

●県・地区委員会活動——“いっしょに県・地区の前進めざす” 仲間の輪に

次に再建された地区委員会と県委員会の活動についてです。決議案では、大会決定でのべられている「交流、連帯、成長を大切に、リーダーのあたたかい『輪』をつくり、ひろげる」ことを大切にしながら、綱領や科学的社会主義、民青同盟の大会決定、組織活動の学習と交流を重視し、リーダーの人的連帯を“民青同盟と地区委員会の前進をいっしょにめざし、支えあう” 仲間の輪に発展させようとよびかけています。

京都・中京地区委員会は、「思いにむきあい、思いをつなぐ、あたたかい中京地区委員会」をスローガンに、地区委員、班員みんなで活動を支えあい、班員の友達などを誘って今年12人の仲間をむかえています。また「財政・機関紙活動のしおり」の学習を大切に、同盟費を納める同盟員は1月からどんどん増え7倍になるなど、組織づくりで前進をきずいています。力になっているのは、

地区委員会や班長LC会議、合宿などを行い、自分史交流や「自分にとっての民青」を語り合うとともに、「なぜ同盟拡大や財政活動にとりくむのか」を率直に交流してきたことです。地域班の班長は、はじめ、「政治のこととか友だちに話すことができない」と話していましたが、「民青で学び、就職のときに契約社員にしかねなかったのは『自分の能力のせい』じゃなく、政治や社会に原因があるんだとわかった。しんどい話も、夢も語り合える民青同盟を大きくしたい」と話すようになりました。地区委員長は「要求が一番の出発点。それを実現していくためにも、自分の気持ちや思いを率直に交流しながら、地区や班のみんなで目標を決めてとりくむのが大事」と語っています。

決議案で述べられていることは、県委員会活動でも大切です。県委員が県内各地に点在していたり、生活や仕事の大変さから、集まること自体にも苦労があると思います。そのなかで、「“民青やめたい”と悩んでいた県委員さんのやりたいことを実現しようと、学習会を行い、その県委員さんが班への援助に前向きになりはじめた」「毎回の県委員会で誕生日会をするようにしてきた」「できなかったことも率直に出し合えるように心がけてきた」など、ねばりづよく県委員会をひらき、大会決定にもとづいてリーダーの輪をつくる努力がひろがっていることは重要です。決議案にもとづいて、そのリーダーの輪を、“民青同盟と県委員会の前進をいっしょにつくる”仲間の輪にしていきましょう。

(5) 学習・交流を大切に、みんなできりくむ財政活動

次に、財政活動についてです。「財政・機関紙活動のしおり」や大会決定を学びみんなできりくむこと、「すべての仲間に声をかけ、願いや関心を聞いて班プランにもりこむ活動と一体に、『自分にとっての民青の魅力』『民青を支えたい思い』を伝え、同じ仲間として率直に同盟費の納入をよびかける」ことが大切です。

大阪・河南地区・ちーたんず班では、9月に3ヶ月ぶりに班会議をおこなうと、ある班員が「サークルが忙しかったり、祖母が体調が悪かったり、いっぱいいっぱい状態」と打ち明け、「そんなときに、地区の常任から同盟費を納めてくれと言われて『民青って結局お金なんですね！』と八つ当たりをしてしまった」と話してくれました。そこで班長が「じゃあ、なんで同盟費ってあるのか、学んでみよう」と「財政・機関紙活動のしおり」をみんなできりました。すると、その班員が「民青ってお金だけじゃないやん」と感想を話してくれたり、他の班員からも「専従の給料になっているって知らなかった」「何で同盟費を納めているのか知っているのと知らないのでは全然ちがう」と感想がだされたそうです。

こうしたちょっとした努力が、財政活動をみんなできりくむ活動にし、一人ひとりの同盟員を大切に作る班をつくる力になります。また、班ノートを作り、係を決め、班で日常的にとりくむことも重視しましょう。

この冬の財政活動は、決議案を討議し、仲間を迎える努力を強めながらとりくみます。募金をよびかける方々から青年の結びつきを紹介してもらったり、加盟した仲間から着実に同盟費を納入してもらい、民青の仲間としての自覚と班活動への参加を強めるなど、班会議の開催と決議案討議、同盟拡大、財政活動を相乗的に強める活動にしていきたいと思います。

(6)「居場所の力」と同盟活動の発展方向について

次に「居場所の力」と同盟活動の発展方向についてです。

第34回大会決定の「居場所を力に青年の願い実現へ」という提起は、大会後の実践のなかで生きた力を発揮していることは、第一章で述べたとおりです。少なくない青年が、切実な願い、関心、前向きな模索をもっているとともに、貧困や自己責任論、競争教育などによって生きづらさをかかえています。また、青年の中に「かえたい」というエネルギーとともに「仕方ない」というあきらめも同居しています。そのなかで、なんでも語り合い、どんなことでも一人ひとりの声にこたえて学び行動することを大切にしたい民青同盟の居場所づくりの努力は、同盟活動の発展の確かな力となってきました。

しかし、「どんな人も居場所がなければたちあがれない」「学習や運動よりもまず居場所になることがなにより大切」などの声や、逆に「居場所は生ぬるい」「たたかわなくなる」などの誤解が一部にあります。全国大会の報告では、「民青同盟の居場所は単に青年・同盟員のなくてはならないよりどころとなっているだけでなく、……2章の要求実現の運動、3章の学習、4章の組織づくりなどの活動発展の努力と結びついて発揮されています」と述べるとともに、「民青同盟の居場所がこのような力を発揮できるのは、民青同盟が青年の願いを大切に、その実現に力を合わせ、日本共産党綱領と科学的社会主義を学び、青年を苦しめる政治や社会をかえる展望をつかんでいるからです」と明らかにしています。そこで、中央常任委員会として、「民青＝居場所」「居場所がないと何もできない」などの一面化や段階論にならないようにするとともに、居場所と要求運動や学習とは一体で力を発揮するものであるという大会決定の正確な理解をひろげ、その立場で実践をすすめる努力を重視してきました。3中委決議案でも、誤解を生むような表現や記述は避け、大会決定でのべた趣旨が正確に伝わるように記述しています。また、青年・学生への魅力の押し出し方も、青年の要求や関心、模索の全体をとらえて、大会決定にそくして民青同盟の全体像が伝わるよう心がけていくことが大事です。これらをふまえ、大会決定を正確につかみ、実践で豊かにし、活動を発展させたいと思います。

大会決定で強調されている「青年にひらかれた居場所で仲間とむかえる」という提起についても、この間の実践をふまえ、一言述べます。これは、班と同盟員が気軽に誰もができる同盟拡大のイメージとして力を発揮している面があるとともに、「居場所になっていないと拡大ができない」という誤解を生む恐れもあります。現実には、この1年、班がひらかれた居場所となって青年を次つぎに誘い、仲間を迎えた経験も生まれた一方で、「うちの班は魅力ある活動ができていないから仲間は迎えられない」などの声にぶつかったこともありました。また、「ひらかれた居場所で仲間を迎える」ということを特別に強調したことで、訪問行動や宣伝、要求アンケートなど多様な同盟拡大の努力が実践的に位置付かなくなる恐れもあります。これらをふまえて、3中委決議案では、同盟拡大の多彩な努力を記述するように努めるとともに、「仲間を迎えてこそ魅力ある班活動をつくれる」ことを述べています。同時に、決議案では、「ひらかれた居場所」の積極面を生かすために、第1章(2)で、ひらかれた居場所になっていくことを、ひろい青年の要求にこたえる班活動のあり方として提起しています。

これらの点をふまえて、今後の同盟活動の発展をはかっていくことをよびかけます。

以上、報告では決議案の説明とともに、機関の役割や学生・高校生分野のとりくみの強化など、同盟活動全体にわたる提起を行いました。この中央委員会が、みんなで民青同盟の魅力と役割を確信にするとともに、全国の経験と英知を集めて組織づくりの前進へ確かな方向を見だし、大きな民青同盟をつくっていく転機となる会議になるよう、積極的な討論をよびかけて、報告とします。

以 上

第3回中央委員会 討論の結語

2010年10月29日 民青同盟中央常任委員会

みなさん、おつかれさまでした。全体討論では39人の方から43回の発言がありました。分散討論も2回行いました。どれも決議案を豊かに練り上げるものでした。

この決議案と報告をつくるにあたって、中央常任委員会として考えたのは、中央委員のみなさんも、全国の多くの同盟員ももっている「青年にとって民青をもっと魅力ある存在にしたい」「仲間を迎え、大きな民青をつくりたい」という意欲にこたえ、ぶつかっている困難を打開し、次のステップをふむには何が大切かということでした。それには、全国の県・地区・班が大会以後つくってきた活動をおおいに確信にしつつ、その上にもう一步ふみこんだ問題提起を率直にすることが求められていると感じました。奈良の谷川県委員長が「今回の報告ほど自分にせまってくるものはなかった」と発言されましたが、この率直な問題提起にみんながむきあい、とりくんできたことをふりかえって、どこに次のステップへむかう糸口があるのか、真剣に考えて討論がおこなわれました。これは、いわば中央委員会自身が、“率直に”と“丁寧”を実践しました。これは今後の民青同盟の前進・発展をめざす上で大きな経験だったということをまず述べておきたいと思います。

1、討論の特徴と決議案・報告の確信

次に、討論の特徴についてです。全体として、決議案と報告の全体が積極的にうけとめられました。それも単に「大事なことを言っている」というだけでなく、「この決議案を班で読みたいと思った」「機関の役割がスッキリわかった」「自分がこれで躊躇を乗り越えられると思った」など、実際の班活動、機関活動、自分自身の活動に生きる方針であることが語られたことは、大変重要だと思います。討論の特徴を2つの点で述べます。

●決議案の3つのプロセスの大切さ、基本的性格の力が、青年の願いや模索にひきつけて確信になった

第一は、決議案の3つのプロセスの大切さ、その根本にある基本的性格の力が、青年の願いや模索にひきつけて確信になったことです。青年の願いの切実さ、探求と模索の深さが、討論でも浮き彫りになりました。

東京から資本論ゼミに参加してきた学生の話がありました。中学時代、生活が苦しく、パートで働くお母さんが疲れて包丁握ったまま寝ている。一家のだんらんもない。どうして自分がこんなに

大変なのか、お母さん悪いのか、人間が悪いのか、社会が悪いのか、どうしたらかえられるのかと考える研究したいと大学にきて、資本論ゼミに感激して民青同盟に加盟したとのことでした。

新潟からは同盟員の模索、まさに「せめぎあい」のリアルな姿が報告されました。ある班員は青年大集会に参加したあと、「集会をやっているが無駄。かわらない」といっていた。班長がショックを受けた。しかも4ヶ月たっても班会をやると、「集会は無駄」といっている。しかしいま「集会にかわる社会をかえられる方法はないのか」という言葉がでてきたとのことでした。西澤県委員長も「どうもあきらめだけではないのではないのか。切実な願いをもっているのではないかと思った」と話されていましたが、決議案にもとづくとても大切な見方だと思いました。

そして要求にこたえ、模索によりそい、政治を動かす多彩な活動を、まわりの青年とともにすすめている経験が交流されました。

島根からは、「若者ほんねトーク」という集会を開いて70人が参加し、青年の声を集めて県に申し入れもして、参加した青年からも「こういうことができる民青はすごい」との感想もあったと報告がありました。そして、いま高校生1000人の就職希望に求人は800人、どんなにがんばっても200人はこぼれる状況だと、11月に再び県交渉を予定しているとのことでした。

沖縄から、「全国の青年が行動することに本当に励まされる。日本から基地をなくす歴史的な行動にしよう」と発言がありました。秋田の大学祭では、平和委員会が行った米軍基地問題のシール投票に約600人が参加したとの報告もありました。沖縄県知事選のたたかいと連帯し、「いっせい行動」に挑んで青年の声をアピールする、そして青年の模索によりそう対話をひろげ、おおいに加盟もよびかけていきたいと思います。

石川康宏先生を招いて生き方と重ねて科学的社会主義の学習会をひらいた愛知では、ピラをみて県内の大学生が参加し、「私自身が現状をあたりまえと考えず、これからはかえていくことを考えたい」とメールで感想をよせてくれたとの発言もありました。

討論を経て、民青同盟の基本的性格が、青年の切実な願いとともに、あきらめの気持ちと「なんとかしたい」気持ちがせめぎあう探求と模索に正面からこたえるものであること、そして青年の「なんとかしたい」思いを政治をかえるエネルギーにしていけることが明らかになったと思います。基本的性格の力をおおいに確信にし、同盟員とともに、まわりの青年の願い、模索にこたえる活動をどんどんすすめていくことをよびかけます。

●仲間を迎え、大きな民青同盟をつくる2つの手応えをつかんだ

第二は、仲間を迎え、大きな民青同盟をつくっていく2つの手応えをつかんだことです。

一つは、この決議案で同盟拡大をみんながとりくむ活動にできるという手応えです。決議案をよんで、「班と同盟員の目線で書かれている」「これを使って率直に議論したい」という発言が、たくさんの人から出されたことに、それが示されていると思います。

埼玉では、県委員会で拡大の議論をしたら、民青の魅力は語られるけど、「友達は対象者と思えない」「学費は話題にしにくい」などの躊躇も率直に出された。そして県委員長の安部さん自身も実はためらいがあった。「でもこの3中委で考えていけば、その躊躇をのりこえられると思った」と発言されました。山口の真鍋県委員長からは、率直に「今までの中央の文書は遠く感じていた。でも今

回の拡大の提起は、とまどいについても丁寧に書いてあるし、私も早く班で話してみたいと思う決議案だった。青年を決めつけしないで、どんな要求や実態をもっているかを大事にしてかんがえながらとりくみたい」との決意が話されました。

もう一つは、実際に足をふみだせば、仲間を迎える班や同盟員に成長していけるという手応えです。この点で中央委員自身が自分の体験をふりかえっていることは印象的でした。

高知の岡田さんは、「報告の提起は本当にそうだと実感した。学生時代に民青に迎えた自分の友達は、『あなたといっしょに活動したい』と自分の本音を隠さず伝えることで関係も発展し、いま地区の常任になっている」とふりかえっていました。機関やリーダー自身がその体験を思いかえしてみれば、「あのとき素直に加盟してほしい気持ちを伝えてよかった」と思うことはあるのではないのでしょうか。そして自分自身も仲間とともに初めての同盟拡大に一步ふみだし、その一步一步を自信にして、成長してきた軌跡があるのではないのでしょうか。中央委員自身もこれからも挑戦の一步を大切に、仲間といっしょに成長しながら、新しい仲間をむかえるために力をつくしたいと思います。

この3中委で得た、「これなら議論できそう」「加盟をよびかけられそう」という手応えを、実際の活動へ生かし、大きな民青同盟への前進に実るよう、みんなで力をあわせることを心からよびかけます。

2、決議案・報告の討議・具体化について

●班プランの具体化・実行を応援しつつ、3中委を全班で討議し、班活動の発展を

次に採択されるであろう決議案の討議、具体化についてです。なにより、班会議を開催し、決議案を全班で討議・具体化することが大切です。その際、班プラン用紙やアンケートを活用するとともに、すでにもっている班プランとの関係では、その具体化に水を差すのではなく、プランをより充実・発展させ、仲間を迎えていく力になる決議として読んでいくことです。

いま9月のよびかけにもとづいてひろがっている多彩な班活動、また「3分間スピーチ」や「民新」「われ高」の読み合わせ、「ご飯をみんなで食べている」などの活動は、それ自体かけがえのないものです。「今期、全班で班会議をひらくことを目標にし、今日ついにそれを達成した」（広島）「出された声に必死にこたえて、同盟員が魅力を実感している」（宮崎）などの発言もありました。それは大変な努力の積み重ねがあったと思います。3中委決議案には、その努力でつくってきた変化をもう一步前へ発展させる方向性がこめられています。班では、とりくんできたことをふりかえって確信にするだけでなく、「民青同盟の魅力と役割は何か」「自分たちがやってきた活動にどんな意味があるか」をより深く考え、「仲間を迎え、大きな民青同盟をつくる意味」をおおいに議論し、次のステップをふみだしていくことをよびかけます。

また機関では、班の討議待ちにせず、機関としてどんどん具体化し実践していくことを大切にしたいと思います。報告については、分量は長いですが、決議案の討議・実践をすすめる機関の役割をつかみ、とりわけ民青同盟の組織づくりでふみこんだ議論をしていく上で大きな力になるものです。くりかえしたちかえって実践に生かしていくことをよびかけます。

●高校生アピールで、高校生分野の前進を

次に、高校生アピールについてです。このアピールの討議・具体化の方向は報告で述べたとおりです。討論でも様々な経験が交流されました。大阪・西淀此花地区では、高校生の深刻な実態をみんなでも共有する中で、最初かたちだけ決まった5人の相談員が、今はしっかり高校生の班会を開催しはじめたと発言がありました。三重では、教師になりたかった同盟員が「高校生に勉強を教えたい」と加盟書に書いているなど、体制強化の条件と可能性は様々あることも浮き彫りになりました。組織づくりの前進をめざす目標のなかに、ぜひ高校生分野を位置づけて、力をあわせたいと思います。

最後に、私たち自身の「仲間を迎えたい」「こんな民青をつくりたい」という自らの思いを大切に、民青同盟の前進へいっしょに力をつくすことをよびかけて、討論の結語とします。ともにがんばりましょう。

以 上